


「遊び心あふれる町」が、 子どものコミュニケーション力を育む

東京都世田谷区で始められた、子ども自身が「遊び」をつくる遊び場の「冒険遊び場(プレーパーク)」が、現在、全国約230か所に広まっている。

子どもたちは、「遊び」を通じて、いろいろな人との「かかわり」をつくり、さまざまなことに興味を持ち成長していく。

「冒険遊び場(プレーパーク)」の活動や、「遊び」を通じて育まれる子どものコミュニケーションについて紹介する。



土を掘って川を作る

「冒険遊び場(プレーパーク)」概要

日本初の常設の「プレーパーク」:1979年開設「羽根木プレーパーク」

「プレーパーク」数:約230か所

(平成20年11月現在「NPO法人日本冒険遊び場づくり協会」の把握数)

運営方法:

自治体(運営資金・場所の提供)と市民(運営)のパートナーシップによる運営が中心

運営人材(常設「プレーパーク」1か所あたり)

- ・プレーリーダー:2~3名
- ・地域の運営者:3~30名程度

子どもが生き生きと遊べる「冒険遊び場(プレーパーク)」を、全国に広める活動を推進している「NPO法人日本冒険遊び場づくり協会」の副代表 あまの ひであき 天野秀昭さんにお話を伺いました。



天野秀昭さん
NPO法人日本冒険遊び場づくり協会
副代表

「冒険遊び場(プレーパーク)」は、子どもが思い切り遊べる「遊び場」だそうですが、具体的にどのような「遊び場」かお聞かせ下さい。

廃材や自然の素材で、子どもが
したいことを実現する「遊び場」

「冒険遊び場」は「プレーパーク」とも言いますが(以下「プレーパーク」という)、子どもが「遊び」をつくる「遊び場」です。

思い切り遊べるように、「プレーパーク」には禁止事項はなく、子どもたちは、廃材、土、水、木、火などを使い、穴掘り、木登り、焚き火など、自分がしたい「遊び」を実現しています。

日本初の常設の「プレーパーク」は、1979年に開設された「羽根木プレーパーク(東京都世田谷区)」ですが、デンマークでは1943年に開設され、ヨーロッパ各地に広まっており、日本での取組のルーツとなっています。

「NPO法人日本冒険遊び場づくり協会」は、「遊び心あふれる町」をつくることを目標とし、日本各地に「プレーパーク」を広めるための活動を行っています。

「プレーパーク」は、日本に何か所くらいありますか。

全国に約230か所、内10数か所が常設の「プレーパーク」

現在、「日本冒険遊び場づくり協会」が把握している「プレーパーク」は、全国に約230か所あります。

その内、常設の「プレーパーク」は10数か所で、その他の「プレーパーク」は、週1回、あるいは月1回程度、雑木林や里山などの場所を借りて開催しています。

「プレーパーク」は、自然が少ない都会の子どもを対象として開設しているのですか。

「プレーパーク」は、自然が豊かな地域でも必要

「プレーパーク」は、都会の子どもだけを対象としたものではありません。

最近では、自然が豊かな地域でも外で遊ぶ子どもが減少しているため、「プレーパーク」は、田畑のあるような地域でも開設されています。

現代社会においては、自然が眼前にあってもその価値に気付かない大人が多く、子どもたちは尚更のこと、自然の中で遊ぶ面白さに気付いていません。自然が豊かな地域でも「プレーパーク」が必要となっています。

「プレーパーク」は、自治体と市民のパートナーシップで運営しているようですが、それぞれの役割はどのようになっていますか。また、協力し

ている市民はどのような方ですか。

運営資金・場所を自治体が提供、運営は、保護者の集まり、大学生グループなど

「プレーパーク」によって異なりますが、自治体が「プレーパーク」の運営資金や場所を提供し、市民が「プレーパーク」を運営する方法を、私達は推進しています。

「プレーパーク」を運営している市民はさまざまで、乳幼児の保護者の集まりや、シニアを中心とした町内会、授業として「プレーパーク」にかかわった大学生グループが新たに「プレーパーク」を開設したところもあります。

これらの市民は、「遊び場」を運営するだけでなく、会報作りや、バザーなどのイベントの準備・開催なども行っています。

「プレーパーク」では、どのような子どもが多く遊んでいるのでしょうか。

幼児から大人、常連も新規もフラットな関係で遊ぶ

乳幼児のお母さんたちが運営する「プレーパーク」では乳幼児が多く遊んでいるというように、運営者により、子どもの層が異なることはあります。しかし、「プレーパーク」には年齢制限はありません。小学生もいれば、中・高校生や大学生も遊んでいます。

小さい時から「プレーパーク」に来ていた子どもは、中学、高校と成長するにつれて、年少者のリーダー的存在となって遊ぶようにもなります。でも



ホースで水遊び



その子どもたちにしても、ボランティアとしてという意識ではなく、本人が「遊び」を楽しむために自然にリーダーとなっています。

「プレーパーク」には、「プレーリーダー」という大人がいますが、「プレーリーダー」も本人が「遊び」を楽しんでいます。

「プレーパーク」では、異なる年齢の人々がフラットな関係で遊ぶことを重視しています。学校は同年代を中心とした社会となっていますが、実社会はさまざまな年齢の人々で構成されており、その人たちとコミュニケーションしながら生きることが必要です。「プレーパーク」で異なる年齢の人と遊んだ経験が、実社会で役立つのです。

また、「プレーパーク」では、特定の子どもたちだけで遊ぶのではなく、いろいろな子どもと遊ぶことも重視しています。「プレーパーク」を訪れる子どもは、常連の子や新規の子などがごちゃごちゃで遊ぶことが多いのですが、新規の子どもでも、すぐに溶け込めるように「プレーリーダー」が配慮しています。

「プレーリーダー」の役割について、詳しく教えてください。

子どものサポートと、「遊び」が受け入れられる社会づくりを目指す

「プレーリーダー」の役割はさまざままで一言では言いにくいのですが、まず、「プレーパーク」でのケガやトラブルへの対応があります。「プレーパーク」では、

子ども自身がしたいことを実現することを大切にしています。その結果、小さなケガはしょっちゅうですが、時には興奮状態になり大きなケガを招きそうな雰囲気になる場面もあります。そのような時にも、例えば僕などは「危ない」と言って「遊び」を止めるのではなく、「どこから来たの」など、その「遊び」と関係のないことを話かけたりします。そうすることにより、興奮状態の空気を変えられます。「プレーリーダー」は、そうした「場を読む」などの気配りを行います。

また、「プレーリーダー」は、「子どもの『遊び』が受け入れられる社会」をつくることを目指した活動も行っています。現代においては、子どもたちの「遊び」を嫌う大人が多く、「なぜそんなことをするんだ」と子どもたちを怒る大人も少なくありません。「プレーリーダー」は、そのような大人に、なぜ「遊び」が子どもにとって重要であるかを説明し、理解をしてもらうように働きかけています。

更に「プレーリーダー」は、子どもの話し相手や、子どもの興味や関心を

引き出すような「プレーパーク」の環境づくり先行っています。

遊ぶことは、子どものコミュニケーション力を育むことにつながりますが、

「遊び」を通じて子どもたちのコミュニケーション力は育まれる

子どもたちは、コミュニケーション力を身に付けることを目標として遊んでいるわけではありません。

「遊び」で重要なのはプロセスです。例えば「落とし穴づくり」が、焼き物のかけらでも発見したらあつという間に「土器探し」に変わるなど、「遊び」は常に変化しています。もし、コミュニケーション力の育成を目標として、それを達成させようとするのであれば、それはもはや「遊び」ではなくなるでしょう。

しかし、「遊び」を通じて、結果としてコミュニケーション力は相当育まれていると言えます。

「遊び」を通じて育まれるコミュニケーション力とはどのようなものですか。

「遊び」によるコミュニケーションは、相手や自分の変化の繰り返し

人間同士のコミュニケーションは、お互いに変化しあうことだと思います。

会話をしている、それぞれが自分の言いたいことを話しているだけでは、コミュニケーションが成立しているとは言えないでしょう。自分が発した言葉が、相手の考えや気持ちに変化を与え、相手からの言葉が自分に変化をもたらす。そういうことが、コミュニケーションだと思います。

「プレーパーク」での「遊び」は、「相手の状況に合わせ、自分も瞬時に変化し、相手もそれを受けて変化する」といったことの繰り返しですが、これはまさにコミュニケーションだと言えるでしょう。

異質な者を排除せず、「遊び仲間」とする力

具体的な例で言えば、「ベーゴマ遊び」で、こんなことがありました。ベーゴマの上手い子どもたちは、相手からベーゴマを数多く取ることを狙っていますが、単に多く取るだけでなく、ベーゴマが上手い子どもとの戦いの中で勝つことに、誇りを感じています。

ある日、ベーゴマの上手い子どもたちが勝負をしているところに、新入りの子が「混ぜて」といつてきたので、きっと上手いのだろうと思い勝負に参加させたところ、まったく下手で、自分たちのレベルに合わないことがわかりました。その時点で、その子を勝負から外すという選択肢もありますが、子どもたちはそうせず、ルールを変え、下手な子どもにはハンデを与え「みそっかす」として一緒に遊ぶ方法を探ったのです。

一度決めたルールなのだからといってそれにこだわらず、それを守れないが入ってきたらその子もいられるようにルールの方を変えて行く。そして共に遊べるようにしていく力というのは、大変なコミュニケーションスキルと言えるでしょう。

現代は、変えることができないものにあふれています。おもちゃなどの商品は完成形で、自分の発想で変えられないものが多いし、ルールも大人が子どもに守ることばかり強要するので、子どもは現状を変えることができません。変えることができれば、コミュニケーションは成り立ちません。子どものコミュニケーション力を奪っているのは大人だとも言えます。

子どもと大人のフラットな関係が、コミュニケーション力の育成に役立っている具体的な例がありましたら教えてください。

子どもは大人とのコミュニケーション意欲を高め、大人も子どもからリターンを得る

子どもは、「遊び」を理解してもらえない大人とのコミュニケーションが苦手ですが、「プレーパーク」で自分たちの「遊び」を理解してくれる大人に出会うことによって、世の中にはいろいろな大人がいることを知ります。その経験によって「プレーパーク」以外の大人とも話をするようになります。

また、「プレーパーク」では、子どもたちは、「プレーリーダー」などの大人に、家庭や学校での出来事を話しかけてきますが、大人も自分の家庭などに



水掛け



2階建ての建物で遊ぶ

ついて子どもに話します。

「プレーパーク」に遊びに来ている不登校の中学生に、「最近うちの子どもが学校を休みがちで心配」などと話す大人に、「おばちゃんちの子は大丈夫だよと不登校の中学生が答え、「あんたが言うなら大丈夫か」などと話していることもあります。大人も、子どもとの会話から、多くを得ていると言えます。

「プレーリーダー」は、不登校などの子どもの相談相手にもなっているのですか。

子どもに直接「きみ学校行ってないの」などと聞くことはしませんが、学校の授業時間に「プレーパーク」に遊びに来ていればそうだとわかります。子どもたちと話す中で、虐待を受けていることなどがわかる場合もありますが、そんな場合は、公的な支援機関などに引き継いだりするなどしています。

「プレーパーク」を運営する上で課題はありますか。

運営資金については、課題が多い状況です。「プレーパーク」は、廃材などを利用しているので、設備には多額の費用はかかりません。しかし、「プレーリーダー」を常駐で置こうとした場合、その人たちの生活を支えられるだけの資金が必要となります。

子どもがケガをした時に病院に連れていくことなどを考えれば、最低2人の大人が「プレーパーク」にいることが必要となります。しかし現在のところ、常駐の「プレーリーダー」を置けるだけの資金を持つ「プレーパーク」は少なく、「プレーリーダー」1名と、それを補助する大人1名で、「プレーパーク」を運営しているところが多い状況です。

自治体によっては、「プレーリーダー」を雇用し、「プレーパーク」に派遣してくれるところもありますので、このような動きを加速する必要があります。

「プレーパーク」のような活動をしたと考えている人たちにアドバイスがありましたらお願いします。

**自分がやりたいことをする。
3人やりたい人が見つかったら始める。つまらなければやめてもよい**

まず、「子どもに何ができるか」や、「遊ばせるためには何が必要か」などと考えるのはやめたほうがよいでしょう。それより「自分がやりたいことをする」「自分が生き生きできることは何か」を考えるとよいでしょう。

次に、3人やりたい人が見つかったら、始めてみるとよいでしょう。2人で

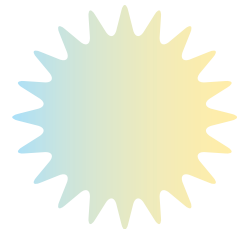
すと意見が分かれた際の対処が難しいですが、3人いれば何とかできます。

そして、「つまらなければやめてもよい」くらいに考えて行ったほうがよいでしょう。「遊び」は、自分が楽しむことが大切です。「遊び場」を運営している大人が「子どものため」だからといって、しかめっ面をしてやっているのでは子どもも楽しくありません。

まずは「遊び」を体感することが必要だと思います。

平成20年11月取材

(本文に掲載の写真等は、「NPO法人日本冒険遊び場づくり協会」提供。写真撮影：関戸基敬)



問合せ先

NPO法人日本冒険遊び場づくり協会
<http://www.ipa-japan.org/asobiba/>